



タイトル Title	ジャジュウオキ(jajwok) : ウガンダ東部パドラにおけるナイト・ダンサー
著者 Author(s)	梅屋, 潔
掲載誌・巻号・ページ Citation	近代,117:1*-45*
刊行日 Issue date	2018-02
資源タイプ Resource Type	Departmental Bulletin Paper / 紀要論文
版区分 Resource Version	publisher
権利 Rights	
DOI	
JaLCDOI	10.24546/81010145
URL	http://www.lib.kobe-u.ac.jp/handle_kernel/81010145

ジャジュウオキ (*jajwok*)

—ウガンダ東部パドラにおけるナイト・ダンサー

梅 屋 潔

(調査協力 ポール・オウオラとマイケル・オロカ=オボ)

I はじめに

ケニアとウガンダの国境、マラバから約 14 キロメートルほど行くとトロロという町がある。かつてはモンバサとの陸運の拠点として栄えたが、現在では夜 8 時になると通りにひっこひとりいなくなるような地方都市だ。私はその町からさらにマラム・ロードを約 16 キロほど入ったところにあるグワラグワラという村で暮らしていた。トロロ県、キソコ郡、キソコ準郡というのが正式な行政区としての名称だが、通常「パドラ」と言い慣わされている⁽¹⁾。「パドラ」の人口のほとんどを占めるのはナイル系アドラ人 (Jopadhola) である⁽²⁾。私がグワラグワラに住みついていたのも、このアドラ人を対象に民族誌的な研究をするためだった。とくに、私の関心は、彼らの宇宙論 (cosmology)、とりわけ、「災因論」と呼ばれるような、何か災いが起こった時に持ち出されるエージェント概念を記録し、解釈することにあつた⁽³⁾。調査は 1997 年に開始され、現在でもまだ継続中である。その方法は、現地の人と話した内容を録音し、逐語的に書き起こして、さらに英語に翻訳したテキストを作成し、それを日本語に訳すという迂遠なもので、そのプロセスのなかでわからないことを助手であり研究協力者でもあるポール・オウオラや、マイケル・オロカに尋ねながら解釈を進めた。その意味では、この論文は、少なくとも 3 名の、考え方によっては話者も含む 4 名以上の合作といった面がある⁽⁴⁾。

本稿の目的は、その民族誌資料の一部を報告することにある。本稿では、イ

インタビューによって得られた録音資料に基づいて作成された「テキスト」に解説を加え「ジャジュウォキ」(*jajwok*)の観念をよりくわしく検討する⁽⁵⁾。本稿で扱う資料は文脈をこわさない程度に、ある程度まとまった内容をまとめ、適宜「テキスト」には最低限の編集が加えられている。

ジュウォキなしに人は死なない

パドラでは今日でも、以下のようなことわざが知られている。

Dhano kitho mungoye jajwok.

ジャジュウォキなしに人間は死なない。

このことわざは文脈によってさまざまな用いられ方をするが、崇りなどを軽視したり葬儀のプロセスを簡略化したりすることや、むやみに人間の妬みを喚起するような、「富」や「権力」の誇示を戒めて用いられることが多かった。

この語の構成部分である *jwok* は、アドラ語と同系統のアチヨリ語の *jok* と同根であると考えられている。

現代アチヨリ語（ルオ語）における辞書的な意味は以下の通りである。

jok *pl* *jogi n* god, spirit, demon [Odonga 2005: 88]

jok *noun* god, spirit, demon [Adong & Lakareber 2009: 40]

Mogensen [2002] が Lienhardt [1961] の議論をアドラのフィールドで追認するために再度焦点化したことからわかるように、西ナイル系比較民族誌の文脈では、この語の語根であるジョク *jok* (言語によってはジュウォク *jwok*、ジュウォク *juok*) が、重要な位置を占めてきた。

…*jok*の力がなかったならば、ディンカは「生きる」ことさえかなわず、苦難に耐えることもできないのだ、と Lienhardt はいう。Lienhardt のこの研究は、もはやディンカ宗教の古典と言ってい。 *jok* は、ディンカにとって、その苦しみの経験を外部化することを可能にし、他者との協力のもとにその苦しみの経験に対処することを可能にするものなのである。同様に、ジョパドラも、自分の生あるいは行為がなぜかねじ曲げられており、その理由がわからないとき、つまり、彼らがなぜ苦難に直面しているのかということだが—彼らは「世界を問いただす」。そして、どのような *juok* が彼らの生に干渉しているのかを問うことによって、また、その *jok* との対話に入ることによって、未知のものに名前をつけるのである。このことは多くの場合ト占師を訪れることによって行われる。しかし、*juok* にかかわる多くの行為が、家族のなかでト占師にうかがいを立てることなく行われるのも事実である。「*kweri*を終わらせる」あるいは「ものごとをまともにする」といわれる、しばしば長々しい、費用のかかる儀礼の遂行のなかで見いだされる、ある問題の原因追及と解決策をめぐって交わす会話や、それらについての考え、そして行われる交渉のなかで *juok* の果たす役割に重要な意味がある。

…「信じること」は、「この世界と他界とのフロンティアに対する気づきを意味する」。私には、*juok* がこのフロンティアを接合して横断する方法のひとつであると思われる。彼らの知っている生と、彼らが理解できない生の釣り合いをとる、また、そして彼らの生と他の人々の生とを釣り合いをとるための社会的エージェントによるたゆまぬ努力の一環なのである…。 *juok* は、動きゆくなかで何らかの行為を行おうとするときに用いられるいくつかの技法のひとつであり、そのようなかたちで人々が苦難に直面した際のレジリエンスを反映しているのである。… [Mogensen 2002: 434]

これまでに比較的優れた民族誌的研究を参照することができるランギを例にとっても、Hayley [1940, 1947] は、この概念を中心に据えて宗教的世界観を描き出そうとする (Hayley [1940] は、Hayley [1947] にその一部として収録されているので、以下では後者に依拠する)。Hayley [1947] は、ランギの宗教と呪術の世界を、ジョクの力との関係から、以下のように想定する (鍵括弧内は引用だが、その後に丸括弧の中に具体例などの内容の下位区分を要約的に補っておく)。

「A. ジョクは、宇宙 (universe) に浸透している中立的な力のひとつであり、人間が用いることなしには、人間に対してよく働くことも悪く働くこともない。」 [Hayley 1947 : 3]

「B. 常ならぬ、あるいは明確な理由がわからない自然現象は何らかのかたちでジョクの「力」の一面と関係があると考えられる。」 [Hayley 1947: 3-6] (1. 異常出産、2. 雨石や丘など異常な自然物だがそれほど例は多くない、3. 奇跡的な出来事、4. 幸運と不運)

「C. よくなじみ深い盛衰のなかでも、経験的に予言したりできないし、コントロールもできない、社会的に意味のある現象は、ジョクの力と結びつけて考えられる。」 [Hayley 1947 : 6-11] (1. 雨や、雹、雷などの自然現象、2. 病気、3. 事故などの不幸)

「D. ジョクの力は、人間の感情が昂ぶった状態のときにあらわれる。」 [Hayley 1947 : 11-15] (1. 性交渉、2. 踊り、3. 忘我状態)

「E. 人間に危険な状況や物にはジョクの力があらわれる。」[Hayley 1947 : 15-16] (1. 狩りと獐猛な動物、2. 戦い、3. 旅行、4. 部族の法を破った場合)

「F. 私たちがふつう魂とか靈魂という言葉で表す人間誰もが持つ一部と結びつけてジョクの力は考えられる。」[Hayley 1947 : 16-22] (1. テイポとチェン、2. テイポが生きている人間を悩ませる場合、3. 夢)

アドラの場合には、以上のような現象群を、Hayley [1940, 1947] が行ったようには、ジョクから発生する論理的な仮定や前提といったかたちでうまく描き出すことはできそうもない。きわめて緊密にこの語根から派生する語彙と結びつけられる場合もあれば、別の語彙と結びついてジュウオクに類する語彙ないし観念と結びつかない場合があるので、それらは個別に記述する。

ケニア・ルオについて報告する Ocholla-Ayayo [1976 : 160] は、「ジャジュオク *jajuok*」を、反社会的なウィッチクラフトの代表だとし、「ナイトランナー」「ナイトウィッチ」であると規定する。特徴として考えられているのは、たとえば豹や鱷、ハイエナなどのような野生動物を飼い慣らす能力を持っていること、夜中に通りかかった人間を誰彼かまわず脅かすこと、墓場を暴いて手に入れた死体の腕など体の一部で暗闇のなか人間を殴打すること、などである。彼らは人に危害を加える際に毒を用いるのだ、という人もいるし、毒は使わない、という人もいるという。この点は議論がわかれるところのようである [Ocholla-Ayayo 1976 : 160-161]。

II テキスト

1 ジャジュウオキの種類

(1) 用語としてのジャジュウオキ

用語としてのジャジュウォキの解釈に、統一見解を得ることは、きわめて難しい。語根を共有するジュウォギとは、文脈を異にすると別な意味になるために全く関係がないという人もいるほどである。以下はテキストである。

〈テキスト1〉

…ジャジュウォキという語にはジュウォキ（という語根：梅屋注）があるが、ジュウォギ *jwoki*（霊）という語とはこの場合のジュウォキは関係がない。ジュウォギは、死者の霊。ジャジュウォキは、ウィッチクラフトをおこなったり、毒をもったりして人を殺害したりする存在のことである（①）。

パドラにおいてジャジュウォキは、ふたつの意味領域に分けられる。ジャジュウォキ・マ・イド *jajwok ma yido* あるいはジョイイド *joyido* とは、人々が寝静まるのを待って夜中に裸で体中に灰を塗り（②）、周囲の屋敷やホームステッドなどをかまわず走り回る、いわゆるナイト・ダンサーである（③）。彼らは肛門から自動車のヘッドライトのような明かりを放ち、車に見間違えるくらい早く走る。ただ、肛門は一つなのでヘッドライトにみえる明かりは一つなのだが（④）。

それに対して区別されるのは、他人に毒を盛ったりして人を殺すようなやからなことである。食べ物や飲み物に毒を混入させるのが常套手段である。だからジュウォキは、食べ物にキダダという毒を盛ることも指す（⑤）。ビールを飲むチューブにつけるのが一般的だ。ただ、食べ物に汚いものを混入させるだけのことだ。食べ物を食べながら、あるいは酒を飲みながら、それに何か混じっていて、体内の消化器系に入ってしまったことに、犠牲者は気がつくだろう。それがよくないものであることもすぐに気がつく。ひどければその日に死んでしまう（⑥）。

彼らはただの人間だが、ナイト・ダンスだけではなくウィッチクラフトもおこなう者もいる。落花生などを露店などの小売りの売り子から買うと、小さな紙切れを折り丸めてそれに包んでくれる。落花生を食べ終わってその包み紙を捨てると、その包み紙をつかって彼らはウィッチクラフトをかけ、その紙で落花生を食

べた人間の命を狙うといわれている。ここがナイト・ダンサーと、ウィッチクラフトが交差する部分である。霊的なものと、薬草などの効き目とを明確に区別するのは、難しい (⑦)。

キダダなどの毒は、即効性があるのですぐにわかるが、ナイト・ダンサーのおこなうウィッチクラフトは、「呪詛」(ラム *lam*) と症状による区別はほとんどできない。「私は、ジャイイドとジャラミを区別することができない」と明言するアドラ人もいるほどだ (⑧)。

口、つまり言葉を用いて他人に憑依し、いわゆるウィッチクラフトを行うもののことを、ジャジュウォキ・マ・イイロ・ジョといい、ジャジュウォキのカテゴリーに含まれる (⑨)。

ジャシエシのなかには、足跡のどろを用いてその持ち主に何らかの作用を及ぼすことができる者がいる。どろを用いて呪われると、当事者がどれだけ遠くに離れていても確実に影響があるし、時にはキダダよりも早く死に至る。イ・チョモ・ヤーシ・イ・マセンボ・ペレ *i chomo yath i masembo pere* (足跡に薬を植えつけて殺す邪術) という言い方をする (⑩)。

ジャジュウォキ・マ・デロ *jajwok ma delo* (畑のウィッチ)。この種のウィッチは腰に薬の入った袋をぶら下げており、その人が通った畑は不毛になるとされる (⑪)。

また、ジャジュウォキ・マ・オロ・ティボ *jajwok ma oro tipo* (死霊を用いるウィッチ) というのもいる (⑫)。…

(2) 異常出産⁽⁶⁾と双子 (ルート *rut* / ウェンギ *wengi*)

〈テキスト2〉

…奇形の子供のこともジュウォキ *jwoki* ということがある。過去にはそういった子は、壺に入れられてブッシュに遺棄されたり、蟻塚に押し込まれたりしたという。ルート *rut* (双子) もジュウォキの一緒なので、ヤウォ・ルート *yawo rut* (双

子を開く) などの手の込んだ儀礼が必要とされるのだ⁷⁾。…

【解説】

「ジャジュウォキ」とその類義語についての解説には諸説ある。しかし、ここでは、まず、「ウィッチクラフトをおこなったり、毒をもったりして人を殺害したりする存在」(①)と、その反社会的側面を最初に強調する。この場合にはウィッチクラフトも含めるとするとその範囲は非常に広いものとなる。行動面から体に灰を塗り(②)肛門から光を放って(④)、夜踊り狂うという行為を行うナイト・ダンサーと(③)、「食べ物」や「ビールのチューブ」にキダダという毒を盛る一毒を盛るこの行為のことすらジュウォキと「霊」との同音語で呼ぶ—ジャジュウォキとを区分している(⑤、⑥)。このキダダは、非常に強力で、これを飲むと助からないという話はあちこちで聞いた。⑦の記述からは、二者の連続上には邪術師も想定されているようだ。⑧で言われるように、症状の面から「呪詛」(ラム *lam*) と区別することが難しいウィッチクラフトもたくさんあると考えられているようだ。

⑨であげられる例も、厳密に言えば、望ましくない未来を口にするウィッチクラフトだから、「呪詛」(ラム *lam*) に含まれるはずであるが、「年長者に対して不敬な態度(侮辱的発言や頼まれごとをむげに断ること)をとった場合」という条件が満たされない場合には(たとえば年少者の側が「呪詛」した場合、あるいは「呪詛」に先行する年長者に対する不敬行為が認識されなかった場合など)、こうした類のウィッチクラフトとみなされるのであろう。

足跡のどろを用いてかける邪術(⑩)や、薬を腰につけているという畑のウィッチ(⑪)などが、その意味領域の延長上に措定されている。この二つは、いずれも「泥の使用」や、「腰に薬の入った袋をぶら下げている」など行為の外形上の観察による区別である。⑫の「ジャジュウォキ・マ・オロ・ティボ *jajwok ma oro tipo* (死霊を用いるウィッチ)」は、ある意味では、ジャシエ

シと呼ばれる施術者はみなこのカテゴリーに当てはまる。彼らは一度霊に憑依されており、その霊を通じて霊界の別の霊とコミュニケーションできる、という点が、力の根拠とされることが多いからである。

ジュウォキの別の用法として、奇形や双子を指すことがある。具体的な実在者をこの用語が指し示すことには、大きな意味があると思われるが、ここではその事実を指摘するにとどめておく。

この意味でのジュウォキは、出産後に殺害されることが多かった。補足のテキストを提示する。

〈テキスト3〉

…Q：ジュウォキ *iwok* が生まれることもあると聞かすが、本当ですか？

A：普通ではない出産がそういう風には呼ばれることがある。手足がないとか、目がない、口がない、など。時には頭が二つあることもある。そういうときは人間のなかでいかなる立場に位置づけていかよくわからない。動物の一種と思えることもある。

Q：そのようなジュウォキ *iwok* をどのようにしてとり扱うのですか？

A：口の広い壺を用意してその生き物を入れ、森のなかに遺棄して餓死させることが多い。その森がどこなのかは誰にも知らされないし、そこにそれを遺棄したということも秘密にされる。生まれた日に行われるのがふつうである。…⁽⁸⁾

なお、殺害されはしないものの異常出産としては代表的なものに以下の4種類があることを付け加えておく。

1) 逆子 (オソ Otho / アソ Atho: 男性名 / 女性名の順。以下同じ)。アブノーマルと考えて双子と同じ扱いをされることがある。また、オソ *otho* は、「死」と同音語である。

2) オンデラ Ondera / アンデラ Andera

生まれつき臍の緒が二本ある子供がいるという。出産のときには本当の臍の緒を切るが、もう一本はその上に飛び出しているともいう。これは双子には含めないし、神秘的な能力に結びつけられることも少ないが、このように名前をつけることになっている。

3) オウマ Ouma / アウマ Auma

生まれたときに普通は顔が上になっているものだが、顔が下向き（地面に向いていた）だったときにこの名前が付けられる。しばしば鼻が地面に最初に当たるといふ。これも逆子の一種と考えて双子儀礼をおこなう場合がある。

4) オクム Okumu / アクム Akumu

生理の停止によってその妊娠が認識 (*dhoko ogamo lye makoruku dwe*) されなかった子供。

これは、アドラでは多く、双子に準ずるあつかいをうけることがある。つまり、しかるべき双子儀礼の一部（ヨコ *yoko* 儀礼）を行い、母方の親族が集まって儀礼をおこなうが、双子の薬草（ヤーシ・ルート *yath rut*）は用いられない。これに続く子供は、オケロ / アケロ、オマラ、オシンデ…⁽⁹⁾という双子にちなむ命名法を続けることがある。

これ以外にも実際には一人しか生まれなかったが、「双子」と認知される例がある。

5) ムカマ Mukama

本当は双子なのだが、双子の一方は、豹となって森に暮らしているという信仰がある。そういった信仰をもつ屋敷では、見えない豹が自由に出入りできるよう、小屋の壁に穴をあけておき、食事のときにもその穴のそばに豹である双子のぶんを供えることになっているという。ここでは、以下のようなテキストを紹介しておく。

〈テキスト4〉

…動物と同時に生まれた、といわれる人がいる。そのカウンターパートは、一緒に生まれたときにもそれは目には見えないが、そのときの様子を当人の親族などが、夢などで見て人に語るようだ。とくに、当人が病気になったりして、そうした夢を見たために双子儀礼をしなければならなくなることもある。カウンターパートの動物のための住処として小さな小屋を建てて、母屋にも出入りができるような小さな出入り口をつくる。折に触れ、その動物、たとえば豹のための食事もその出入り口に準備する、というようなことはかつて行われていたし、いまでも行われているかもしれない。…

2 ナイト・ダンサーとは誰か？

(1) 宗教か性癖か、あるいは病気か？

〈テキスト5〉

…ナイト・ダンサーは、現在でも存在する。どの村にもいる。宗教的な活動ではなくて、性癖や嗜好と考えるべきだ。たんに腹が減るとそうするのだ、という話を聞いたこともある (①)。ナイト・ダンサーはなぜ夜踊るのか。その実践を彼らなりの宗教儀礼のようなものだという人もいるが (②)、この性癖は家族のものであり、遺伝的なものである (③)。

ナイト・ダンサーのことを病気だ、という人もいる (④)。ティダ *tida*、カルンバ *kalumba*、ブラ *bura*、ミセウエ *misewe* などの病はみなこの症状—夜間戸外で踊りまわる—を示す (⑤)。…

(2) ナイト・ダンサーは何をするのか？

〈テキスト6〉

…ナイト・ダンサーはたんに夜中に走り回るだけではない。眠っている人々の小屋の扉を背中ではノックする者たちもいる (⑥)。その小さな音で目が覚めて扉の所

へ行ってみると、誰もいない。また眠ろうとするとまた小さなノックの音がする。こういうかたちで人々の安眠を妨害するのだ (⑦)。

彼らのなかには、「カトゥール、カトゥール、カトゥール」という音を立てる者もいる。腰につけたしゃれこうべが互いに当たる音である (⑧)。屋敷に足跡を残していく者もいる (⑨)。

夜中に近所の扉を叩いて回るので、ジャクリ・ペチヨ *jakuri pecho* (屋敷の警備員) という皮肉なあだ名で呼ぶものもある (⑩)。

近所にナイト・ダンサーが住んでいて、その行動を見たことがあるという人がいる。ナイト・ダンサーも何か悪いことをしているのではなかった (⑪)。誰かを殺したりした後だから踊っているとかいうこともなく (⑫)、人の財産に手をつけるわけでもなく (⑬)、ただ単に裸で走り回ってそれを楽しんでいるだけだった (⑭)。ナイト・ダンサーはウィッチではない (⑮)。姦通を働くでもなし、盗みを働くわけでもない。そのときの彼らの振る舞いは、ちょっと宗教の礼拝に似たようなところがあった。食事の前に祈りをささげるような、そんなところも観察できたのである (⑯)。…

(3) ナイト・ダンサーは、癖である

〈テキスト7〉

…ナイト・ダンサーは、はからずして人間に危害を加えることもある (⑰)。ナイト・ダンスは、よくない悪癖であり、学生が学業をおろそかにする原因にもなるし、友人たちがそれを知ると孤立してしまう原因にもなる (⑱)。

あるアドラ人が、次のような歌を低い声で歌うのを聞いたことがある、という。

matoke maka ochami

kerango ?

mwenge maka ohingi

kerango

この屋敷のバナナ

いつ食べられたのか？

この屋敷のムウエンゲは

いつ醸されたのか？

この歌の真意は、この屋敷の主がいつ死ぬのか、ということである (19)。…

【解説】

ナイト・ダンサーはどこにでもいる、というのが定説である。大きく分けるとその実践は宗教的な儀礼であるとする説 (2) と性癖だとする説 (1)、病気だとする説 (4) があり、性癖であるという考えが多数派を占めるようだが、いずれにも若干の支持者はいる。

⑤で列挙される病名はいずれもパドラでは一般的な精神疾患である。ということは、ナイト・ダンサーの行動はかなり一般的なものであり、症状だけではナイト・ダンサーなのか、「ティダ *tida*、カルンバ *kalumba*、ブラ *bura*、ミセウエ *misewe* など」の精神疾患なのか、区別はつけられない、ということでもある。

「人々の小屋の扉を背中でノックする」(6)「腰につけたしゃれこうべ」で「カトゥール、カトゥール、カトゥール」という音を立てる」(8)、「屋敷に足跡を残していく」(9) というが、これらを目撃したり、確認したという証言は得られていない。とくに扉のノックを背中でしているかどうかは、目撃でもない限りわからないはずであるが、そこが焦点化されることはない。目撃例は、のちに見るように、裸であること、狂ったように踊ること、といったような行為に限定される。

危害を加えることがない、と見限られて恐怖の対象にならない場合には、⑩のように警備員のあだ名をつけられることにもなる。

目撃者のなかには、食事の前の礼拝を見るような気持で彼らの実践を見た者もいるらしい (16)。とくに、踊るだけで何も悪いことはしていない場合にはなおさらのことである (11,14)。そういった意味では「反社会的」とはいても、殺人 (12) や、盗み (13)、姦通などとは明確な犯罪性に乏しい。ウィッチと交差することによって初めて、ジャジュウォキの「反社会性」は際立つのだが、これは、15のように、区別されることもある。

安眠妨害だけではなく (7)、人に危害を加えるかもしれない (17) 悪癖であるという。ここでは学業をおろそかにする、というってつけたような理由が挙げられているが、孤立することは事実のようだ (18)。

19であげられているのは、ほとんど邪術といってもいいほどだが、言葉にしていることに注目すれば「呪詛」の側面もある。文脈からいってこの歌が夜人知れず歌われたためにナイト・ダンサーのものとされたのであろう。ということは、仮に邪術として (本当は) ナイト・ダンサーではない人間が同じ行動を示したとしても、その時間が夜であれば、ナイト・ダンサーであるとみなされ、その行為内容が逆転してナイト・ダンサーの特徴として語られた可能性は高い。

(4) 家族に継承される性癖

〈テキスト8〉

…ナイト・ダンサーの性癖は、家族に受け継がれるもので、その家族には1人あるいは2人いることが通常である。祖父にナイト・ダンサーがいれば、一屋敷の子供のうちのだれかがナイト・ダンサーの跡を継がなければならない。もし子供が5人いれば、そのうちの少なくとも一人や二人はナイト・ダンサーとなり、残りの子供はナイト・ダンサーとなることを拒否する (1)。

私に息子がいたとする。私がジャジュウォキ・マイイドだったら (私は違うが)、息子が同じようになれるように訓練するだろう。薬草を食べさせ、その分野での専門家にしようという努力をする。多くは、祖父や祖母から、孫へと伝えられる

ものだといわれる (②)。祖父、あるいは祖母は孫たちを集めて、一緒に眠り、眠っている間に鼻から薬を注入するのだ。子供たちは眠っている間に何が起きているかは全く知らない。子供たちは薬草で傷つけられ、薬草を吹き付けられ、そしてある場合には鼻から吸引させることで、ナイト・ダンサーとして一人前になってゆく (③)。

あるときそんなナイト・ダンサーの英才教育を受け始めた子供がいた。霊がその子にちょっとした攻撃を仕掛けてきているようでもあった (④)。ある時、最終試験だと言って、土竜の掘った穴のところに行き、薬草を与えて、これで穴の向こう側まで通り抜けろ、という。こんな大変な修行を誰が信じられますか？ (⑤)
…

【解説】

ナイト・ダンサーは、血縁をたどって継承されるものと認識されているが、全員が継承するわけでもなければ、継承者が一人でなければならない、というわけでもない (①)。しかも、祖父／祖母から孫といった互隔世代で伝わるようだ (②)。もっともナイト・ダンサーである祖父／祖母は後継者さがしに積極的なようだが、後継者探しは必ずしも安泰ではなさそうである。継承は、教育の成果が実を結ぶこともあるが、本人の意思も反映される。本人の意思で拒否される前に知らず知らずのうちにさまざまなかたちで祖父／祖母たちに薬を処方されてナイト・ダンサーにされてしまう例も指摘される (③)。また、最終試験と称しておよそ不可能な修行の例も指摘されている (⑤)。また、この例では、ナイト・ダンサーも召命型シャーマンのように、霊のメッセージによってなる者がいる、という解釈も示される (④)。

ここで注目したいのは、最近ではほとんどすたれてしまった習慣だが、パドラでは、伝統的に男の子と女の子は特定の小屋に泊まって生活する習慣があったことだ。女の子の小屋はオディ・ニール *odi nyir* といい、男の子の小屋はシ

ンバ *simba* といった。多くは祖母が小屋の主だったが、まれに祖父のこともあったという⁽⁴⁰⁾。親からすれば、この間に祖父／祖母独特の教育の環境があるわけで、万一自分の子供がナイト・ダンサーだったとしても、この目が届かなかった間に伝承された、という説明で辻褃があうわけである。そういった意味では、この既存の慣習の存在ともこの信仰は平仄が合っていると見える。

3 ナイト・ダンサーには自覚がない

(1) 昼間はふつう／自分も気づいていない？

〈テキスト9〉

…彼らの活動は、極秘裡におこなわれるので、夜でないとその活動を発見することはない (①)。自覚的ではない、という説もある。あるアドラ人は、「私は、彼ら自身、自分がそうした活動をしていることに気づいていないのではないかと思う。」と言っていた (②)。西ナイル、ネビのアルルの人々は呪術を使って、他人を当人が知らないうちにナイト・ダンサーにしてしまう。アルルは人を罰したり、人に復讐したりするときに、その能力を用いるという (③)。…

(2) ナイト・ダンサーは、祓うことができる

〈テキスト10〉

…ジュウォク・マ・イイド・イ・ニャロ・チョウォ *juok ma yido i nyalo chowo* (ナイト・ダンスは、祓うことができる) という言い回しがある。

ナイト・ダンサーの屋敷系に生まれ、ナイト・ダンサーだった少女が結婚した。夫はそれに気づき、殴られ、離婚されそうになった。しかし、次のようなやり方で「祓う」ことができた (④)。

胡麻を炒って薬草と混ぜ、クウォンと鶏を調理した。その料理を親に持っていくという名目で実屋敷に行くのだが、その際実屋敷は全員留守にしていなければいけない (⑤)。万一誰かいればその人は即死する。娘は両親の小屋の出口に料理

を置いて、夫の屋敷に帰ってくる。その際誰とも口をきいてもいけないし、両親の屋敷からの帰り道には振り返ってはいけない (⑥)。…

【解説】

ナイト・ダンサーは、夜にしかその顕著な活動を示さないのので、夜でないと観察されない (①)。逆に言うと昼間はふつうの人間なのである。この二重性が極端な場合には「自分でも気づいていない」(②)とされることがある。復讐や、他人に対する攻撃として、当人も知らないうちにナイト・ダンサーにしてしまう方法を知っている民族もいるという (③)。

逆に、系譜をたどって受け継いだナイト・ダンサーの系譜を祓い落す方法もあると考えられている (④)。テキストでは、婚出した娘が実屋敷の親に胡麻と葉草を混ぜた鶏の食事を持っていく、という作法を意図的に失敗することで、その系譜を「祓い落す」方法が紹介された。実屋敷の屋敷人は全員留守にしておく決まりであり (⑤)、また、料理を置いてその関係を祓い落したあとには、振り返ってはならないという禁止事項が紹介された (⑥)。

4 きまった拷問と処刑の仕方

〈テキスト 11〉

…埋葬儀礼で遺体を洗い⁽¹⁾にいけば、遺体の尻にバナナの茎が刺さっている遺体にでくわすこともあるだろう。その遺体の主が、ナイト・ダンサーであったことがそのことでわかる。それは、パドラでナイト・ダンサーを拷問する決まったやり方なのだ。

パドラでは、ナイト・ダンサーを見つけると、その額に釘を打ち付け、その尻の穴からバナナの茎や花を突っ込むことになっている (①)。女ならば陰部に突っ込む(②)。しかし、そうやって責められてもなお、そいつは自分がナイト・ダンサーであることを認めないだろう (③)。ナイト・ダンサーは自ら自分がナイト・ダンサー

であることを認めるよりは死を選ぶものなのだ (④)。

もしナイト・ダンサーを捕まえたら、そいつはほかの人に言わないでくれ、というだろう。口止め料代わりに自分が持っているすべての牛をくれる、というかもしれない (⑤)。ナイト・ダンサーにとって、自分がナイト・ダンサーであることが他人に知られることが何よりいやなのである。もし、秘密は守る、という約束を取り付けたとしても、妻にこっそり打ち明けたりしないか確認するために屋敷まで後をつけてくるだろうから注意が必要である (⑥)。

もし漏らしてしまったら、ナイト・ダンサーはそれ以降、あなたをつけ狙うことになるから非常に危険なことになる (⑦)。もし秘密が絶対に守れるのなら、ナイト・ダンサーとでも生涯の友となることができる (⑧)。

しかし一方で、ナイト・ダンサーは、その存在を認めない人間に対して毒を盛る、という話も聞いたことがある (⑨)。あるときカトリックの神父がその犠牲となり、ヨーロッパに渡ってあらゆる手を尽くしたが、治らず、結局は隣国ケニアで薬を手に入れ命だけは助かった。その薬を手に入れるまでの苦労と出費は大変なものだったと聞いている。…

【解説】

私は埋葬の現場で、尻や陰部にバナナの茎を刺した遺体は目撃したことがない。遺体を洗うのは女性の仕事なので、こうした秘密は女性が握ることになる。

額に釘を打ちつけ、尻や陰部にバナナの茎を押しこむ、といった方法 (①、②) で魔女狩りよろしく拷問するのだが、絶対に自白はないという (③)。文脈から自白しないままこの拷問で死んだ例もあるようなので (④)、無実のまま死んだ例もあるに違いない。2⑫のように、人の呪術でナイト・ダンサーにされてしまったり、ナイト・ダンサーであることを本人も気づいていないとすると、自白のしようもない、という循環論に誘い込まれてしまう。

現場を押さえられたナイト・ダンサーは、「牛をすべてくれる」など、熱心

な口止め工作を行うという (⑤)。しかし、疑い深いナイト・ダンサーは、妻との会話も盗み聞きする (⑥)。

漏らしてしまったら最後、命をつけ狙われるので毒や邪術の恐怖におびえなければならぬ (⑦)。ただ、稀なことではあるが、信用され、秘密を守ると、力を貸してくる生涯の友となることもあるようだ (⑧)。この例は、あとで紹介する。

秘密を漏らすだけではなく、存在を否定する者も敵視し、毒を盛る (⑨)、ということだから、「ナイト・ダンサー不在論」の論陣を張るのも命がけ、ということになる。

5 ナイト・ダンサーの目撃事例

以下も、録音資料を起こしたテキストであるが、ひとつの完結した事実関係を語っているため、事例として報告する。

(1) 祖父の妻はナイト・ダンサー

〈テキスト 12〉

…ナイト・ダンスのときには男であれ女であれ完全に裸でなければならない (①)。私は実際にナイト・ダンサーを見たことがある。それは結婚したばかりの頃で、妻を呼んで何が起こっているか見てみようと言ったのをよく覚えている。私はこの目でしっかりと見た。

私の祖父の妻はナイト・ダンサーだった (②)。名前は言わないでおこう。私は亡き祖父と非常に仲が良く、小屋も近い場所に建てていた。祖父が亡くなった後、彼女を相続した男がいた。毎晩のように祖父の屋敷にやっけておしゃべりをして帰っていった。彼は本当は、おしゃべりしながら日暮れを持ち詫びていて、祖父の屋敷からの帰りには、晴れてナイト・ダンスしながら帰って行ったに違いないと今にして思う。

ある月夜の晩、いつものようにおしゃべりしていると思っていた二人の姿が消えた。扉が閉まったので不審に思って扉の近くに行った。扉には南京錠がついていなかったの、母屋から南京錠をとってきて、閉めようとしたときに私は見ってしまったのだ (③)。

二人の人間が素っ裸で真剣に踊っている (④)。足を高く上げて首の後ろにひっかけたり (⑤)、足を打ちおろしたりして (⑥) 体中が真っ白になるほどアクロバティックだった (⑦)。私は鍵を閉めて遠くに離れて身を隠し、物を投げて物音をたてた。彼らはそれに気づいて扉に走り寄り、扉に鍵がかかっていることに気付いた。彼らの肌は、まるで豹の毛皮でも着ているかのように白かった (⑧)。楽しいのかどうなのかは分からないが、特定の一族に伝わる趣味や嗜好のようなものなのだろう (⑨)。…

(2) 私の生涯の親友だったナイト・ダンサー

〈テキスト 13〉

…人がいなくて誰もいないところで、ナイト・ダンサーと畑を耕していると、チヨ *chiyo*、チヨ *chiyo*、チヨ *chiyo* と籬のような音がする。それは、ナイト・ダンサーの脇の下から出てくる音なのだが (⑩)、ナイト・ダンサーはそれを気づかれまいと、わざとしゃっくりが出たふりをする (⑪)。

私は若いころブニョレに耕作の出稼ぎに出かけた。その仲間の一人に、そういう男がいた (⑫)。彼はナイト・ダンサーだったのだ。私は母にそのことを告げたが、彼は私を慕っているのだから、黙っていなさいと言われたので、ずっと黙っていた (⑬)。確かに彼は私が耕すのに飽きて休んでいると私の分まで耕してくれたりした。ブニョレへの出稼ぎで、彼は私以外の誰とも一緒に組んで耕作しようとはしなかった。そしてそのチヨ、チヨ、チヨという音が始めると、本領発揮して彼は飛び上がり、踊りながらすさまじい速度で耕作をはじめ、私の分まで耕してしまうのだった (⑭)。

私は音で彼が来るのがわかるようになったが、黙っているようにという母の言いつけを守って黙っていた。最近彼は死んだが、これまでこのことを誰かに話したことはない。私たちは、またとない親友だったのだ (15)。…

【解説】

事例としての情報が豊富なので、多くの解説を要しないが、完全に全裸であったこと (1、4)、真剣であったこと (4)、体の色が白くなっていたこと (7、8) などがわかる。体の色が白い、というのはパドラの多くの病に共通するし、葬儀の際には、かがり火の灰を魔よけに体中に塗る習慣があったという事実、また、II 1. ②にふれたように、ジャジュウォキのステレオタイプの認識として体中に灰を塗っている、という認識も喚起される。体に灰を塗れば、当然体は白く見える。「足を高く上げて首の後ろにひっかけたり」(5)、という話ジャジュウォキの典型的な動作として、あちこちで聞いたことがある。「楽しいのかどうかわからない」特定一族に伝わる趣味嗜好 (9) と話者はとらえているようだが、祖父の妻ということで、自分はナイト・ダンサーの系統ではないことをほめかしてもいる。

ナイト・ダンサーは畑を耕すときに脇の下から「チヨ、チヨ、チヨと籬のような音」が出るので見分けがつくのだという (10)。一緒に出稼ぎに出た仲間にもそういう人間がいた (12)。その音がするとたちまちのうちに畑の耕作は終わり、人の分までやってくれるのだという (14)。しかし、誰の分でもやってくれるわけではない。音でナイト・ダンサーであることを見抜けるようになったにもかかわらず、母の助言によってその秘密を生涯守ることに決めた話者にとっては、ナイト・ダンサーはまたとない友人でありつづけたという (13、15)。ナイト・ダンサーであることは知られてはならない、ということとセットで、この秘密を守ってくれる人間には利益をもたらす、という考え方がある。

6 ナイト・ダンサーを捕獲する その1

(1) ナイト・ダンサーである親戚を殺害

〈テキスト14〉

…ナイト・ダンサーを捕まえる方法のひとつとして、小屋の扉の鍵をかけないでおく、という方法が知られている。彼らは後ろ向きにお尻でノックするので、扉が閉まっていなるとそのまま小屋のなかに後ろ向きに倒れこむ。そこをとらえる、という方法である (①)。

かつて私たちがまだ学校に通っていた子供だったころ、あのオレンジとマンゴーの木の近くで私の亡き父がナイト・ダンサーを捕獲したことがあった。父は、叫び声をあげて小屋のなかの家族に出てくるように促したが、私の父の3人の妻のうち一人が私を含めて子供たちをそこにはいかせなかった (②)。なぜなら、男はそこでみなに殴られ、殺される場所だったからだ。いわゆるモブ・ジャスティスである (③)。

父がとらえたとき、男は、こんな歌を歌ったという。

Aronda makira piyerani

Oboth ogoyani gi kasiki machi

アロンダは私の腰をつかんだ

オボスは私を殴った

かがり火の丸太で

この男は、オボスがかつて屋敷から追い出した男で、このオボスはわれわれの近所の人だった。この歌は、私の父に、隣人として迎えてほしかったナイト・ダンサーが、追い出されたことを恨む歌である (④)。

父がナイト・ダンサーを捕まえたことは、極秘裏に処理された。ナイト・ダンサーは、イトコであり、私たちのオジの息子の一人で、あたりまえのことではあるが、

そのオジは父の兄弟だからである (⑤)。…

(2) 夫が仕掛けた罠にナイト・ダンサーが

〈テキスト 15〉

…ナイト・ダンサーは今日でも確かに存在する。また、これからも存在し続けるだろう。アミン大統領がアジア人を追放した後のある日のことだ。かつては、ナゴンゲラにいたインド人は軍備の一環として夜間焚火を欠かさなかった。軍備ではないにしてもわれわれも店舗等の治安目的で明かりを灯し、警備の人間を置いていた。警備は松明と、短刀で武装していた。知っているものはほとんどいなかったが、その警備担当こそ、ナイト・ダンサーだったのである (⑥)。それまで私の屋敷の女の子たちが、衝立のなかで水浴びしているとき、頭から灰をふりかけたらしい (⑦)。悲鳴が起こったが、私たちは彼女たちが暗闇で怯えて、何もないのに勘違いをしているのだと考えていた。しかし、ある日、実は彼がナイト・ダンサーであることを夫から打ち明けられて驚いた。また、私たちがそのことを知っていることを本人には気づかれてはならないという (⑧)。

私の夫は、その日、見てしまったのだ。その警備の老人が、その男が体じゅうに灰を塗り、またさらに自らの頭、背中、胸などに灰をふりかけながら、踊り狂っているのを (⑨)。松明や警棒やジュートでできたアスカリ用の寝袋などそっこのけだったということだ (⑩)。

ある日のこと、私の夫は、出張に行くときにはいつもそうするように、明け方の電車に乗っていく予定だった。ちょうどその出発時刻に、このナイト・ダンサーが夫が仕掛けてあった罠につかまって、裸で捕獲されたことがわかったのだ (⑪)。その罠は、たとえば畑にキャッサバ泥棒などをつかまえるために仕掛けるもので、かけた側がそばにいる必要はなく、かかった側は、まる 1 日ほども意識を失ってしまう強力なものだ (⑫)。

私の夫は、もう屋敷を出発していたが、列車に乗る直前に、あわやというところ

ろで近所の人に連れ戻され、事なきを得た (13)。もしそうでなければ、つかまったナイト・ダンサーは衰弱して死んでしまったであろう。薬で捕まえた人間を解放する方法を知っているのは薬を仕掛けた人間だけなのだ (14)。近所の人は、夫にナイト・ダンサーを解放するように頼んだ。もうすぐ教会に行く人々が通りかかるころであり、そうすれば全裸の警備員が彼らの目に触れることになる。夫は引き返してきて、とらえられた男のベッドシーツをとりあげ、男の顔を叩いた (15)。これが解呪の方法であったのだろう、男の目が開き、意識が戻った。それは午前9時ごろのことだった。夫は男をさらしものにし、人々は裸の彼を見て笑いあざけた (16)。男が死んだのは、それから何十年も後のことだが、この一件のあと、この男がナゴンゲラでナイトダンスしたという話は聞いていない。

夫はその後、キリスト教の熱心な信者となり、泥棒などを捕獲する薬は捨ててしまった。そういう薬があるので、人の畑でトウモロコシなどを見ても、手を出してはいけない。穀物倉を開けたとたん蛇が出てくるようなおそろしい薬を持っている人間もいると聞く (17)。…

【解説】

①では、ナイト・ダンサーを捕獲する方法が具体的に語られる。その習性を巧みに利用したものであるともいえる。ナイト・ダンサーは危害を加えないものもいるとはいえ、捕獲計画が立てられていたとしたら、それなりに害はすであつたのだろう。この事例では、モブ・ジャスティス（群衆の裁判）と言われるリンチによって、殺されてしまった (3)。殺害現場を見せたくないから、義母は話者を含む子供たちを現場に行かせなかったのであろう (2)。このことは、たんに倫理的なだけではなく、後に見るティボの祟りを避けるためにも重要な対処である。ただし、④で話者は通り一遍の解釈しかしていないが、殺された男の歌ったとされる歌は意味深で、オボスの妻アロンダと殺されたナイト・ダンサーとの間に情が交わされていたことを想像させる。あつてはなら

ない恋愛関係の結果、誰かが死ななければならなかった場合にも、ナイト・ダンサーは非常に便利なイディオムである。この場合には、ナイト・ダンサーと同じクランであることを話者はとくに隠していない (⑤)。

続く〈テキスト 15〉は警備員がナイト・ダンサーだった例だが (⑥)、すでにみたあだ名で明らかのように、警備員とナイト・ダンサーはもともと相性がいい。水浴びする女たちの頭から灰をふりかけるなど (⑦)、このナイト・ダンサーは、いたずら好きだったようだ。ナイト・ダンサーとは、裸で一心不乱に踊り狂うものとされるが、この目撃談からは、それ以外にも体中に灰を塗ること、また、踊っている最中にも自分の頭、胸、背中などに灰をふりかける習慣があることがうかがわれる (⑨)。踊ることに夢中で、仮眠をとることなどは忘れていたようだ (⑩)。

夫は、正体を突き止めたあとも、妻に口止めしていた (⑧)。このテキストだけではわからないが、正体を知った者に対してナイト・ダンサーが危害を加えるのを恐れたか、あるいは、別の資料に見るような、秘密を守って何らかの利益を得ようとしたものと思われる。

ところがこのナイト・ダンサーは夫が泥棒よけに仕掛けた呪術にあっさり引っかかってしまい、捕獲される (⑪)。この呪術を解呪できるのはかけた人間だけなので (⑭)、まさに列車に乗って出張に出かけるところだった夫は連れ戻され (⑬)、解呪してナイト・ダンサーをさらしものにする (⑮、⑯)。途中からこのテキストの焦点はナイト・ダンサーから、泥棒を捕獲する呪術のほうへ焦点が移っていくが (⑰)、こうした呪術をしかける手続きの多くも、夜秘密裏におこなわれることになっていることには注視しておくべきであろう。

7 ナイト・ダンサーを捕獲する その2

(1) エンジンを積んでいるような速度／見たことのないような獣

〈テキスト 16〉

…ナムワヤで埋葬があった晩、バナナの葉っぱを振り回して走り回るジャジュウォキが出たという (①)。危害を加えようとか、誰かを殺そうとかいう意図はないのだろうが、こちらが恐ろしくなって逃げると、そいつはどこまでも追ってくる (②)。埋葬儀礼の最初の夜に出た、というので若者たちがこいつを捕まえようと考えて、寝ずの番をしていた (③)。

やがて時間が来て、「やつ」が出たのだという。ところが、驚いたことに「やつ」のスピードは尋常ではなくて、まるでエンジンを積んでいるようなスピードで走り回ったそう (④)。それでも若者たちは諦めずに、疲れてスピードをゆるめるまで追いかけた。すると見たこともないような獣が現れて、「やつ」はその背に飛び乗って走り去った (⑤)。おっていた男たちも恐れをなして、それ以上追うのは諦めた。…

(2) 捕獲に失敗、もうこりごり

〈テキスト 17〉

…近所の屋敷に夜な夜なあらわれるナイト・ダンサーがいた。捕まえてやろうと庭のマンゴーの木に登った。つかまえようとするものは、日が暮れる前に屋敷の外で待ち構えるものだ、といわれる (⑥)。それは、ナイト・ダンサーは、踊り始める前に人間がいるかどうかを臭いで確かめる、と信じられているからで (⑦)、もし人間が存在することが知れてしまうと捕まえるのに失敗するからだ。早く夕食を済ませて、屋敷の外で待ち構えるのがよい (⑧)。その男もそうなのだ。ナイト・ダンサーは屋敷の臭いをかぎ回り、大丈夫と判断したのだろう。屋敷に入ってきた。ところが、このナイト・ダンサーは、大きな豹を連れてきて、大きな木の下にその居場所を決めた (⑨)。しかし、そこは男がナイト・ダンサーを捉えようとして待ち構えていた木の下だったので、男は降りることができない。飛び降りるにも、高すぎて、失敗すればけがをしそうな高さだった。その夜、男が木の上から動けないでいる間に、ナイト・ダンサーは夜中じゅう好きなことを存分にして

豹とともに帰って行った (⑩)。それから男はナイト・ダンサーを捕まえることはあきらめ、二度とはこんなことは試みないことを固く誓ったのだった (⑪)。…

【解説】

埋葬の際には、親族や近隣の人々は夜通し泊まっているので、その時の出来事である。死者の埋葬初日に何か出たとすれば、死者の霊とか、死者の死体を狙うウィッチなどが想像されるが、ここではそうではない。バナナの葉っぱを振り回して走り回ったという (①)。しかも、参列して遺体を守っている親族たちを追いかけまわした、というのだ (②)。若者たちは、それを捕まえようとするのだが (③)、すさまじいスピードで捕まえることができない。「エンジンを積んでいるようなスピード」なのだそうだ (④)。このように自動車や電気など、近代化によってもたらされたものを譬えに用いる例は多い。結局は見たこともない獣の背に乗って逃げ去ってしまう (⑤)。

近所に現われるナイト・ダンサーを最初から捕まえようとする (⑥)。ナイト・ダンサーはまず屋敷の人が眠っているのか匂いで確かめてから踊るとされているので (⑦)、日が暮れる前に外で待っているのが常道とされているという (⑧)。誤算だったのは、ナイト・ダンサーが豹を連れてきて、捕獲しようとした男の隠れている木の下にその豹をつないだことだ (⑨)。木から下りるに降りられず、捕獲の目論見が外れて、ナイト・ダンサーに存分に思いを遂げられてしまった男は (⑩)、2度とナイト・ダンサーを捕えようとは考えなかったという (⑪)。

8 正体が知れないジャジュウオキ

〈テキスト 18〉

…オコス・ジョンはトロロの街では羽振りのいい、化粧品を扱う商人だった。彼には長い間その価格競争の点で張り合うライバルがいたのだ。

ある朝のこと、いつものように化粧品を販売している店を開けようすると、

出入口で3枚の硬貨を見つけ、それを拾った。前日に売り上げを計算したときに落ちたものか、あるいは誰かが朝早くに店の前を通りかかって落としたものか、よくわからない。しばらく不思議な気持ちでカウンターに置いておいたのだが、どこかに届けるということもなく、まず、店を開けてから、その硬貨を売り上げや釣り銭など他の店の金が入っている引き出しにしまった (①)。

別の入り口から外に出てみると、驚いたことに、雄鳥の頭 (ウィッチ・ウオド・グウェノ *wich wodi gweno*) が屋敷の前に吊されていた。頭はまだ切り落とされただばかりで、血が滴っており、新鮮だった。その日の朝に吊されたものようだった (②)。

不吉を感じたジョンは、近所の店の者や、その通りを通る人々にそのことを話した (③)。そのあたりでそれまでそんなことが起こったことは一度もなかった (④)。近所の人々は口々に、それは「ジャジュオキ」だ、ダノ・モロ・オイリニ *dhano moro oyirini* だと言った。誰かに呪いをかけられたのだ、というのである。彼は鶏の頭のことだけではなく、誰がおいていったか落としていったかはよくわからない3枚の硬貨のことも話した (⑤)。この間、雄鳥の頭は吊されたままである。こういったものには、うかつに触れると、大変危険だからである (⑥)。

まず、薬草を使うジャヤーシ *jayath* (薬草師) が呼ばれ、雄鳥の頭が取り除かれた (⑦)。薬草 (ヤーシ・オソ *yath oso*) を振りかける必要があると判断されたが、施術師にも手持ちがなく、探しても手近にある薬草でもない (⑧)。結局その場では浄めの儀礼を行うことはできなかった。

呪いをかけた者が誰かも、その目的もわからなかったが、そのままではジョンに何らかの危害が及ぶ可能性が残っている、と施術師は言ったし、人々もまたそう思っていた (⑨)。薬草師は薬草を集めて改めて施術をしにくることを約束したがその日はそれ以上のことはできなかった。

その日、店を閉めるまでの商売はいつもと変わりはなかった。疲れ切ってふらふらしながら屋敷に戻ると、ひどい頭痛を訴えて寝込んだ (⑩)。

次の日、再び薬草師が呼ばれ、薬（オヨ・ヤーシ *oyo yath*）で燻して、ジュウォギを祓おうとした。しかしその薬の効き目は長くて2日間と考えられていた(11)。治療から時が経つにつれジョンの状態は次第に悪くなり、次の日には発狂して、誰も何も食べてはいないのに、誰かが雌鳥を食べている、とあらぬことを口走るようになった。薬草師も本人も予想していたことだが、薬の効き目が切れたのであった(12)。

5日後、ジョンを救うために、村人の1人がサミアの村の呪術医のもとに走った(13)。その男は、薬草師でもあり、霊を扱うジャシエシ *jathieth* でもあった。彼の指示で、呪われた男（ジョンのこと）は祭祀小屋（サウォ *sawo* またはキスエス *kathieth* という）に連れてこられた。いわれるままにそこを訪れたが、施術料はとんでもなく高くついたようだ。正確には話者も知らないが、噂では牛二頭にくわえ白い雄鳥を払ったといわれている(14)。

サミアの施術師は、ジョンは商売敵に呪われているのだと診断し(15)、適切な処置を施した。効き目はあらわれ、1週間で連れて帰ることができた(16)。施術師によれば、呪いの目的は、彼を狂わせ、死に至らしめることだったという(17)。

施術師には、もうその店は閉めるようにといわれ、そうすることにした。店にあった品物もすべて運び出し、別の場所が見つかるまで自宅の小屋に保管することにした(18)。また、施術師によると、硬貨がその敷地で見つかつても前にしたようにそれを捨ったりしてはならない、とのことだった(19)。そのような金は呪術がかけられている。引き出しに入れてあった他の金もどこかへ行ってしまう(クワロ・ワコ *kwalo wako*) ような呪術だ。その呪術をかけられると、引き出しの金だけではなく、どういふわけかわからないが、知らず知らずのうちに損をし、どんどん貧乏になっていってしまうのである…(20)。…

【解説】

他者への攻撃の意図をもって術をかける者を、これまで人類学では「邪術師」

と言いつわしてきた。すでにあちこちでその区分の有効性は疑われているが¹²⁾、ここでもそういった存在のことまでもジャジュウォキといいあらわす例のひとつが示されている。

起こったことを時系列順に並べていくと、次の5つのフェーズに分けられる。

- A 3枚の硬貨の発見、鶏の生首の発見
- B 近隣住民の介入
- C 最初のジャヤーシが呼ばれる
- D 2日目のジャヤーシの治療
- E サミアのジャシエシの治療（5日後）

それぞれを場面ごとに見ていこう。

- A 3枚の硬貨の発見、鶏の生首の発見

店の前に落ちていた3枚の硬貨（①）と店先に吊された鶏の生首（②）、非常に印象的な道具立てが記述されている。ここで重要なのは、これだけの具体的な道具立てが揃っているのに、「ジャジュウォキ」が疑われることである。逆に言うと、英語でいう *sorcery*、それを訳して「邪術」として定着した、加害の意図を込めた実践にぴったりあてはまるアドラ語はない、ということでもある。ジョンは、まず硬貨を拾ってしまっている。これには、呪術が込められていたことはあとになってわかる。家から金が出て行く、という呪術である（⑩）。

- B 近隣住民に相談

住民の解釈では、これは誰かがかけた邪術なのではないか、という。すぐに近隣で相談したことからも（③）、「これまでそんなことが起こったことはない」（④）という言葉からも想像がつくように、近隣関係が非常によく、ここでの

犠牲者がこの地域社会では十分な役割を果たしているだろうことがうかがわれる。3枚の硬貨のことも正直に話したようだ(⑤)。近隣住民も、明らかに不吉な印象を持たせられる鶏には、危険なので誰も触らなかった(⑥)。

C 最初のジャヤーシが呼ばれる

呪われている可能性がある鶏の頭を取り除くためにも、何らかの専門家への依頼が必要だった。しかし、ここで呼ばれたジャヤーシは、適切な薬を持っておらず(⑧)、吊された鶏を取り外しただけである(⑦)。まだジョンには、邪術の効力が及ぶ危険が残されたままである(⑨)。ジョンはそのまま仕事を続けたが、疲労と頭痛で倒れた(⑩)。

D 2日目のジャヤーシの治療

薬草師は薬草を燻らせてジュウォギを祓ったが、効き目は2日間とわかっていた(⑪)。果たして効き目が切れると、ジョンは発狂してあらぬことを口走るようになる(⑫)。

E サミアのジャシエシの治療(5日後)

近隣の男がサミアのジャシエシに治療を依頼した(⑬)。ここでも近隣の人間関係が良好であることが示唆されている。ここで商売敵がかけた呪いであったと診断が下される(⑮)。殺害の意図もあったという(⑰)。この時点までは、明示的診断はくだっていない。このサミア人のジャシエシが診断をくださまでは、三枚の硬貨と鶏の生首という物証が残されていただけで、何ひとつその存在を示唆するものはなかった。人々はジョンの相談を受けてすぐにジャジュウォキだと推測した。その時点ではまだジョンには「不幸」すら起こっていなかったのである。治療の内容は、つまびらかではないが、サミアだということと祭祀小屋サウォの記述から、がらがらなどを用いたバントウ系の儀礼が行わ

れたであろうことは想像される。1週間かかったということと(16)、謝礼が高価であったことが特記される(14)。店を閉めること(18)、今後似たようなことがあっても硬貨を拾ってはならない(19)などの指示が出された。硬貨にはお金が出て行ってしまうクワロ・ロコの呪いがかけられていたと知らされる(20)。

Ⅲ 考察とまとめ

まとめよう。まず、ジャジュウォキとは何か¹³⁾。これまでみた諸特徴を備えたいっぽうの極として、反社会的なジャジュウォキが想定される。仮にこれを「ウィッチとしてのジャジュウォキ」としよう。

それは、他人に毒を盛ったり、他人の足跡のどろを用いて邪術をかけたりする。また、腰に下げた袋の薬で通りがかりの畑を不毛にし、悪意をもってウィッチクラフトをかけ、死霊を使役する、反社会的存在である。正体は明らかになっていないが商売敵であるジョンを殺そうとした8(「正体が知れないジャジュウォキ」)の相手も、そうである。

このジャジュウォキの被害に遭った場合には、最悪の場合、命を失うことがある。まさに忌避すべき存在である。

人々が折に触れ捕獲の方法を開発したり、実際に捕獲して私刑の対象にしたりするのは、まさにその凶悪性、および反社会性ゆえなのだし、ひとたび容疑者を見定めたならば、額に釘を打ちつけ、尻や陰部にバナナの茎を押しこむ、といった方法で魔女狩りよろしく拷問するのもそのためである。ウィッチとしてのジャジュウォキは、こうした恐ろしい存在だ。

その一方の極として、「性癖」や「病」としてある意味では、騙されて、本人の意思にかかわらず継承してしまったり、あまつさえ、他人の意図でそのようにされてしまう「ナイト・ダンサー」もいると考えられている。しかもそれが同じ「ジャジュウォキ」の語彙で呼ばれる。

彼らの生態は、一見すると非常におかしい。笑いを誘う、といってもよい。実際にインタビューの最中にも、笑っている老人も多かった。これを便宜上「ナイト・ダンサーのジャジュウオキ」とよぼう。

夜中に服を脱ぎ捨て、その体に灰を塗り、肛門から光を放って、人の屋敷で夜どおし踊り狂う。踊っている最中にも灰を頭から、胸から、肩から、全身にふりかける。ここで分析的に深めることは難しいので指摘だけしておくなら、体に灰を塗るのは、通常はだれかの埋葬儀礼に際し、ピド *pido* (服喪) の期間に近親者が行うことである。

彼らの「性癖」として言及される一連の所作、すなわち、小屋の扉を背中でノックする、腰のしゃれこうべが、「カトゥール、カトゥール、カトゥール」という音を立てる、屋敷に足跡を残していく、などの行為自体には、殺人や、盗み、姦通などのような深刻な犯罪性はいっさいない。脇の下から「チヨ、チヨ、チヨと雛のような音」をだそうと、足を高く上げて首の後ろにひっかけたりしようと、「楽しいのかどうかわからない」だけで、それ自体は何ら他人の社会生活を脅かしたり、影響したりするものではない。むしろ、捕獲されて白昼堂々裸体をさらされれば、「笑いもの」になったり、泥棒よけの呪術でやすやすと捕獲されたりして、凶悪性は乏しい。

もちろん、彼らは見つかりたくはない。夜の闇に身をひそめる。目撃されたら、エンジンを積んでいるようなスピードで逃げ回ったり、見たこともない獣の背に乗って逃げ去ってしまう。仮に逃げ切れなかったとしても、財産を投げだして口止めするが、それがかなわないと命をつけ狙うようになる。

このように、ジャジュウオキの観念についてつきつめて考えてみると、いつも奇妙な循環論に陥ることになる。

たとえば、あるジャジュウオキを捕獲しようと、小屋の鍵を開けたまま罌を仕掛けたとしよう。彼が捕獲しようとするのは、たんに踊り狂う「ナイト・ダンサーとしてのジャジュウオキ」だろうか。ジャジュウオキがいつまでも踊り

狂う「マニア」でいてくれる限りにおいては、捕獲する側のリスクが大きすぎる。知ってしまった以上、ずっとつきまとわれるかもしれないのだ。もし捕まえたら殺してしまうくらい覚悟が必要である。「安眠妨害」だけでそんなリスクは冒すだろうか。真剣に罫を仕掛けるときの標的は、常に「ウィッチとしてのジャジュウォキ」のはずである。

疑わしい人間を捕まえて拷問にかけたとしよう。はじめから死ぬまで口を割らない、とわかっている相手を拷問する、ということは、殺す、ということと同義である。しかも、本人も知らないのかもしれないのだ。夜の自分がジャジュウォキであることを。殺したら、今度は、ティポ（死霊）の報復を恐れなければならぬだろう。

彼らは、自分がナイト・ダンサーであることを知られたくないという。知られたら、殺されてしまうかも知れないからである。ではなぜ殺されてしまうのか。ジャジュウォキである以上、「ウィッチとしてのジャジュウォキ」の犯罪も汚名もすべて着せられるに違いないからである。秘密を知った者をつけ狙うのも当然である。それが知られたら命が危ないのだ。拷問されても口を割ることはない。本当のところは、彼ら自身知らないのかもしれないのだ。このようにジャジュウォキの存在形態は、人をエンドレスの循環論に巧みに落とし込んでいく。

別な観点から見よう。今度はジャジュウォキの被害者の立場から見る。すでに何らかの好ましくない症状が出て、悩まされていることだろう。ジャジュウォキに、毒を盛られたり、さまざまな方法で邪術をかけられた際の症状は、「呪詛」（ラム *lam*）と区別することが難しく、また行動面でも「呪詛」と類似しているという。「呪詛」についてはのちに詳しく見るが、ここでの議論にかんするかぎりはすでに知っている予備知識だけでじゅうぶんである。「呪詛」が可能性から排除されるのは、その病の「症状」や不幸の「現象」それ自体の特徴によるのではない。たとえば、被害者が長老だったり、年長者への失礼とい

う心当たりなど、「呪詛」を招くとされる条件が整っていなかっただけなのだ。だから、この場合にもほかの霊からの攻撃も含め、実際の症状にジャジュウォキのウィッチクラフトだというラベルが貼られるのは、他にもありえたひとつの可能性のひとつにすぎない。

また、これを呪いの言葉をつぶやいた行為者の角度から見ても、同じように解釈の幅が出てきてしまう。ネガティブな未来像を口にしたことは、事実であろう。その行為者が、「呪詛」ではなくジャジュウォキと判定されるのは、「呪詛」をかけるには分不相応な年少者だった、とか、「呪詛」に該当する関係性が、見出せないために、狭義の「呪詛」と考えるケースにはあてはまらないだけである。ネガティブな未来像を口にした、その行為実践としてはジャジュウォクだろうとラムだろうと、まったく同じことなのである。

さらに、夜裸で外に出たがる、という行為は、他の数多くの精神疾患と共通の症状とされていることを思い出そう。ティダ *tida*、カルンバ *kalumba*、ブラ *bura*、ミセウエ *misewe* など、いずれもパドラでは一般的な精神疾患である。ということは、ナイト・ダンサーの行動はかなり一般的なものであり、夜の闇は極端な話、ジャジュウォキだけの独壇場なのではない。他にも何人もの人間が踊っているかもしれないのだ。夜間外で踊っている、という外形上の行為だけではそれが「ナイト・ダンサーとしてのジャジュウォキ」なのか、はたまたしかじかの精神疾患ゆえのことであるのか、傍目には区別はつけられない、ということでもある。

このように、最大公約数をまとめたところで、この概念の性質が明らかになることはない。当たり前のお話である。「ナイト・ダンサーとしてのジャジュウォキ」は、「ウィッチとしてのジャジュウォキ」とときにシンクロし、その意味するところを重ね合いながらも、最後のところで特定しないでいる。逆からいってもそうである。ちょうど「だまし絵」のように、どちらか一方に特定はできないのだ。われわれのように無関係な外部者からみれば、究極的にはその内容

があいまいに見える。おそらくは、外部者ではない、パドラの人々、いや、当事者にとってもそうだろう。彼らがその解釈の混沌から抜け出せるのは、ジャシエシにより明晰な判定が与えられた後である。であるからこそ、さまざまな新規な未知の現象や出来事を包含するのに、非常に効果的に機能する観念なのだ。もちろん、それがそれらの概念の第一義的な機能ではないとしても、である。ナイト・ダンサーについて話していたら知らないうちにウィッチについての話になっていた、ということもあり得ない話ではない。むしろよくある話なのだ。近所の老婆とジャジュウォキについて話をしていたときのことである。

Q：この村にもジャジュウォキはいるのですか？

A：あたりまえじゃないか。いない村などない。どの村にも何人かはいるものだ。気づいていないのか？毎晩やかましいじゃないか。毎夜踊っているのは、誰だれじゃないかという目星はついているのだが。

Q：それは、誰ですか？

A：言えるわけじゃないか。

Q：どうしてですか？

A：彼らは毒をもっているのだよ。私はまだ死にたくはないのだ。

ここでもみごとに、村で毎晩踊っている「ナイト・ダンサー」として話していたはずの「ジャジュウォキ」が、いつのまにか毒をもっていてその秘密を知った者、その秘密をばらした者をつけ狙う「ウィッチ」としてのジャジュウォキにすりかわってしまっている。この手の交錯が、この観念をめぐる頻繁におこるのだ。

しかし、そういった奇妙な観念ははたしてジャジュウォキだけだろうか？こうした概念のインデックス性は、原理的に不可能なはずのコミュニケーションを事実上成立させるために非常に便利な概念である。

最後に指摘しておくが、「葬式帰りの人間」は皆灰だらけなのである。また、ルスワ *luswa* を祓う薬をつくるもの [梅屋 2017d]、あるいはラム *lam* から身を守ろうとする者などは全裸で施術を行うことになっている [梅屋 印刷中]。仮に「ジャジュウォキなど本当はいいない」としても、人は常に「ジャジュウォキ」らしきものを経験するようになっていたのであった。こうして経験的な裏づけが絶えず得られることにより、こうした信念は経験の反駁から経験的にもまぬがれているのであった。

注

- (1) Kisoko Sub-county, Kisoko county, Tororo District。かつては西ブダマ (West Budama County) と称していた。
- (2) Jopadhola の人口は、2002 年推計で 359,659 人。
- (3) このことの意味について傑出した考察に長島 [1995] がある。長島 [1995] は、ヒトの動物としての特徴として、以下の三つを指摘する。まず第一に、ヒトはその行動にあたって遺伝子によるプログラミングに多くを依っていないことを指摘し、それを初期化だけされてソフトが入っていない状態にたとえる。しかも、たとえば、「人間性」という普遍的ソフトは存在せず、そこでヒトは、個別世界、個別文化、個別社会において個体の外に形成し集積していったソフト—文化を学習によって身につけるのである。

第二に、ヒトは、知的混沌状態には長くは耐えられないために、文化的「説明体系」に依存する。その体系には、「A と B は関連する」とする「相関論」、「A は B の原因である」「こうしたらこうなる」という「因果論」、「A は B に始まった」とする「起源論」、「A は B になるだろう」という「未来論」という論理構成があげられる。これらの論理構成とは別に、「善悪」「生」「死」「楽園」「地獄」「前世」「来世」「神霊」「運命」「運勢」「正義」「邪悪」といった観念が歴史的に独自にあるいは相互影響のもとに形成されてきた。基本的論理と重なり合ってこれらが作り出す体系をコスモロジー、あるいは、「文化的説明体系」と呼ぶ [長島 1995 : 51-52]。

第三に、ヒトは生活において絶えず何かを決めなければならない。その決定には相当の自由度があり、そこに社会にストックされていた文化的説明体系が対応する。この説明体系は、個人の体験にあてはめられてそれに解釈を与える。その説明体系は、発明され、伝えられ、修正され、組み合わせあって、それに対応する行動様式も複雑化

してくる。このように、一般的で普遍的な「説明体系」はない、というのが長島の基本的な考え方である [長島 1995 : 51-52]。

要するに、この普遍的ではない複雑な文化的説明体系の一部が「災因論」なのである。

- (4) これらの資料収集のプロセスについては、梅屋 [2014b]、Oloka-Obbo [2016]、Owora [2016] に詳しい。
- (5) 梅屋 [2007, 2008, 2009, 2010, 2011, 2012, 2014a, 2016a, 2017a, 2017b, 2017c, 2017d, 2018, 印刷中]などで報告してきた。なかでも葬儀にかかわる部分については、梅屋 [2014a, 2015, 2017c] 参照。
- (6) 異常出産は、上に見るとおり、ランギの民族誌的な文脈では、ジョクの「力」の顕現のひとつ「B. 常ならぬ、あるいは明確な理由がわからない自然現象は何らかのかたちでジョクの「力」の一面であると考えられる」[Hayley1940 : 99-100 ; 1947 : 3] とし、その筆頭にあげられているものである。
- (7) 双子が生まれると、初めにどちらが生まれたか区別するために、腕輪をつける。これをアミンダ *aminda* という。小屋のの両側に精霊を祀る社を建てる。その年初めに収穫したものは、雄鶏、山羊などをそこで供犠してからはじめて食べる。子羊の革の一部を胸に貼りつけておくのが決まりだった。たとえ貧乏で羊を屠ることができない場合は、古い革をつけなければならない習わしだった。そうでないと祟りがあるとみな考えていたから、どうしてもそうやっていた。双子（あるいは時には三つ子）誕生のときには、ルート・ミヤウォ *rut miyawo* と呼ばれ、双子儀礼をおこなう。出産当日は、儀礼の責任者となるべきオケウォが見つかるまでは、双子が生まれたことは秘密にしておかなければならない。オケウォを叔父が病気で寝ているということにして連れてくる。小屋に入るとみんなが待ち伏せており、そのなかに新生児の双子（三つ子）もいる、という儀礼をおこなう。叔父はおびき寄せるための名目なのでそこにいないことが多い。双子が男なら3日、女の子なら4日間のちに行われる「双子を連れ出す」（ウォド・ルート *wodho rut*）儀礼までオケウォはその小屋にとどまる。性が違う双子の場合、3日目に男の子のほうを「連れ出し」、4日目に女の子の方を「連れ出す」ことになる。オケウォ滞在中は、その屋敷の一員として、オケウォは自由にふるまうことが許される。もしオケウォがあまり野菜が好きではなくて、肉がその屋敷になければ、勝手に鶏をしめて食べてしまってよい。食べたいというものを準備しなければならない。双子の家族の側には拒否権はない。双子儀礼が完了するまではわがまましほうだいである。注文が満たされない場合には、オケウォが出て行ってしまい、双子儀礼が不可能になる。通常そのようなことは起こらない。

双子の父方と母方、二つのグループで相談してウシか山羊かを供犠する。きっちり半分に分ける。肉のもっともおいしい部分を料理して、大量のクウォンと一緒にそれぞれ

の側から配る。この場合分量は二つのグループで同じになるようにしなければならない。もし、片側の肉が多いようだったら、鍋から出して別の側に移して調節する。残りの肉を皮と一緒に調理したのも残りの肉を皮と一緒に調理したのもも交換される。両者ともそれぞれ8羽の鶏を絞める。ここでは、浄めの儀礼も行われた。白に木の根や葉草を使った薬と水を入れて混ぜ、それに箒を浸して手足にふりかけるのが習わしだった。それをしないと、手足の皮が剥がれていってしまうと考えられていた。

この儀式が済むとオケウォは取り分として二羽の鶏をもらう。

続いて「使えないナイフを捨てる」ボロ・アテロ儀礼を行う *bolo athero*。「ナイフを贈る」(バヨ・アテロ *bayo athero*) ともいう。このナイフは極秘裏に親族に送られるが、それは双子儀礼に協力するようというメッセージである。秘密にするのは誰もこれを本当は受け取りたくないからだ。受け取ると不作になるとも言われている。それは本当のことで実際に霊的な力が働くのだろう。シコクビエだろうとその他の穀類だろうと、たいていその受け取ったものの畑は不作に終わる。

アテロを受け取ることを拒む場合、クウォン、鶏、肉、そして二羽の生きた雛をアテロの送り手の屋敷に贈る。これを「アテロを返す」(ドウオコ・アテロ *dwoko athero*) という。このアテロが別の人に届けられた時にも秘密にされ公にそれとわかることはない。近所の人、収穫の時にその人が不作だという現実を見たとき、彼がアテロを受け取ったのだ、とはじめて知ることになる。

以下は、アテロについてのやり取りである。

…Q：なぜほかのものではなくナイフなのですか？

A：昔からの決まりなので詳しいことはわからないのだが、もう誰も使わないような使い物にならないナイフを使う、と決まっている。このアテロを届けた人は、渡すとすぐに脱兎のごとく逃げ出すきまりになっている。もし捕まったら、屋敷に問題を持ち込んだものとして殴られる。屋敷は不作となり、山羊や牛も、鶏さえも手に入れにくくなるのだから。

Q：どういう人にアテロを渡すのですか？

A：双子が生まれると、双子の母になった人が、「誰にアテロを贈ろうか」と適任者を考える。兄弟や従兄のなかから適切な人を選ぶ。

Q：双子儀礼ではどんな薬を用いるのですか？

A：ヤーシ・ルート *yath rut* 「双子を浄める薬」と呼んでいるのですが、詳しくは知られていませんし、知るべきでもないと考えられています。水と特殊な植物ギラ・ジュウォカ *gira juoka* をすりつぶしたものを混ぜ合わせたものです。その薬を儀礼に参加したすべての人にふりかけます。薬には色がついていますので、皮膚にそのしづく

がついて斑点がつきます。顔につくととりわけ目立ちます。儀礼の最中には灰を体に塗っていますので、それが葉で斑模様になります。ジャヤーンは、子羊と鶏を葉のお札に受け取ります。ジャヤーンは札を受け取ると、葉をもって立ち去りますが、ほかの参加者はその場に残っていなければなりません。儀礼に用いた灰は危険ですので、秘密の場所に捨てられます。もしその灰をあなたの土地に捨てられたら、訴えてもいくらいです。適切な葉で処置しなければ、その畑を耕した人は誰でも体が斑模様になってしまう呪術にかかってしまうのですよ。

- (8) 異常出産に対する対処法については、おおむね双子儀礼に準ずる儀礼が行われるべき、と考えられているようである。
- (9) 双子の生まれた順に、男／女の名がオピオ Opio／アピオ Apio、オドンゴ Odongo／アドンゴ Adongo、オケロ Okello／アケロ Akello、オマラ Omalla／アマラ Amalla、オシンデ Osinde／アシンデ Asinde、オミタ Omita／アマタ Amita、オムガ Omuga／アムガ Amuga、オチャール Ochar／アチャール Achar と続く。しかし、必ず最後までこの通りになづけなければならない、というものでもない。ふつう、子供の名前は祖先のものをもろう。命名された赤ん坊が泣きやまないと、その名前をきらって文句を言っているのだと考える人もいる。生きている人の名前をつけてはいけない。それはそれらの名をもつものの死を願う呪詛と考えられた。最近ではその信仰は忘れられている。いくつも候補がある場合には、二羽の雛に違う祖先の名前をつけておいて屋根の上に放り投げ、初めに落ちてきた雛の名前をつけることにする。(落ちてこなかったほうの名前をつけるという人も) たちまち泣きやむという。死産が続いた後に生まれた子供はオグワング Ogwang、蟻塚の神(ウエレ・ニヤウィリエテ *were nyawiriete*) に対する伺いを立てた後に生まれた子供はオウエレ Owere／ニヤウエレ Nyawere。蟻塚に子供がほしいと願をかけるために、沼の泥を集めて子供の人形(ひとがた)を作り、裸で祈願し、願いを叶えてくれたら供犠することを約束して縄を約束のしるしに残しておく。子供ではなく牛がほしい場合には牛の形に泥を形づくり、鶏の場合にも同じくする。これをロウォ・ルオコ儀礼 *lowo luoko* という。なお、子供が病気になる、施術師の占いによってウエレにその子供が求められていることがわかった場合、オウエレと名付けることもある。その際、その次の子供は双子にちなんだ最終名と同じくオチャールとなづけられるともいう。
- (10) オディ・ニールとシンバは、パドラにかつて存在した年長者の小屋のことである。夕方煙草や当時は10ペンスばかりのお金、そして薪などを持ちよって老女の屋敷に集まる。思春期の少女たちが集まって結婚や恋愛など、男たちに話せないような話について相談してアドバイスを得ていた。老女は結婚生活について経験にもとづいた多く

の話をしてくれた。屋敷の管理その他、現在の少女が得ることはできない、多くの有益な助言がなされていた。ここに少女たちは集まって料理を学んだり、女性として必要な衛生学を身につけ、結婚にそなえる、少女のための教育機関（オディ・フオニ・ニイ *odi fuonyi nyi*）である。キノコの採集方法や歌、セックスのときいかに夫を喜ばせるかという性技、クランや親族とのおつきあいもここで学ぶ。二人一組になって学ぶのが基本。女の子たちが学ぶ生活に纏わること（ニール・オイド・イ・フンジョ・ジョ・ギピニイ・メ *nyir oido i fuonjo jo gikipiny me*）であるが、姻族が一緒であることもあるので、細部については口外しない決まりになっている。教育の内容は以下の通り。

1. ンゲル・マ・マ・ニャパドラ *nger ma lonyno ma nyapadhola*（性教育と衛生学）。
2. ニエル・マ・ルウォ／クロ・キティジョ *nyer ma luwo /kuro kitijo*（結婚というものの原理原則）。
3. イフオンジョ・イウォロ・アダメレ *i fuonjojo iworo adhamere*（義理の母に対する敬意）。
4. イフオンジョ・レゴ *i fuonjojo rego*（マギラを料理するためのシコクビエと白まめのすりつぶし方）。
5. イフオンジョ・ランゴ・オブウォリ *i fuonjojo rango obwol*（キノコの探し方）。
6. イフオンジョ・ジョクウアス *i fuonjo jokwath*（牛の群れの統率）。
7. イフオンジョ・ンゲリ・マ・ウェチヨ *i fuonjojo nger ma wecho*（求愛）。
8. イフオンジョ・テド *i fuonjojo tedo*（料理）。

女小屋に泊まることで、少女は結婚生活の中で予期しなかったことに対処するすべを身に着ける。

マギラ *magira* と呼ばれる野菜の調理方法は、多くの女の子が試されたものだ。それを学ぶ貴重な機会でもあった。豆をすりつぶしたソースでマギラを料理し、一番大切な客に出す料理をつくる。豆をすりつぶし、最高級のシコクビエの粉で調理する。壺の中に食材を入れ、水が沸騰したら、灰からとった塩を混ぜてエキスが煮出されるまでしばらく煮込む。塩がなかったころ、ある種の木を焼いた灰を煮出して塩分を得ていた。それでマギラを調理したのである。

女小屋にあつまっている少女はすでに適齢期で、誰もが結婚したいと思う魅力にあふれた子ばかりだったので、少年たちはそれを狙って、小屋に近くに頻繁に現れた。なかには無理矢理セックスされたような例もあったようだが、表沙汰になったことはない。叫び声を上げて誰も来ない。本当は少女もそうなることを望んでいたのだと、誰もがわかっていて。双子儀礼の時を狙って機会を作ることもできる。少年側、少女側からともに強い男が代表で選ばれ、勝ち負けが決まるまで戦う。扉の近くに敷物が敷かれる。これを見て男たちは戦い方を学ぶ。優れた戦士をリクルートするのもこう

した機会を通じてである。

豆の不作が予想されるときに行われるニャンゴイエ *nyangoye* 儀礼というものがある。この儀礼を行うと収穫は持ち直すと考えられている。ニャンゴイエの歌を歌いながらシココビエ、それから灰と土を混ぜたものをブッシュのなかへ持っていき、おさめる。当時は、ニャンゴイエの歌を歌うのはその儀礼の時だけだった。その灰と土を女たちが歌いながら、股の間を通すしぐさをして、その出産能力を灰と土に託した。現在では少女の性器の一部をひっぱって伸ばし、出産能力を鍛える少女小屋さえないのでその儀礼も廃れてしまったある白人の医師が病院で入院患者の女性のクリトリスが見たこともないほど細長いので驚いて、病院の男性の同僚に相談した。「彼女のクリトリスはこんなに細長いんですが、何か病気なんじゃないでしょうか？」と。同僚は、アドラ人の女はそうなのだ、病気じゃないよ、とこたえた。最近の女たちは、老女にそのようにして性技を教わったりすることが重要だとは思っていないようだ。それから最近は祖母と一緒に住むことが少なくなっている。母親は（タブーだから）教えられないからね。一週間でもお婆さんのところにやって住まわせて伸ばせば別だが、それをやるものもない。しかし、それができる老婆もだんだん死んでしまっている。」

「一方、男子小屋 *odiyach* と呼ばれるものはなく、同じような機能を担うものは、シンバ *simba* と呼ばれる。「男たちは単に「強くあれ」「小屋を作れ」と教えられるだけで、結婚生活の細々した重要なことは教わらない」という。

- (11) ミスミヤ・ベンデイ *misumiya pendi*（腐ったバナナの茎）を用いて遺体を洗浄するのは老女の役目である。老女は、供犠された牛のキラドゥック・マ・ディアン *kiladuk ma diang*（牛の胆嚢）を報酬としてもらうことになっている。
- (12) 例えば、加藤・浜本 [1982] は、「他者に対して危害を加える神秘的な力についての諸観念をつむぎだしてゆく際に、そうした力を、必ず、外在する手段に訴えるものかその必要がないかのどちらかの形で構想しており、どちらの形をとるかには必ず首尾一貫した理由がある、というわけである…残念なことに、他者に神秘的な形で危害を加える能力を信ずるすべての社会が、その力を「妖術」と「邪術」の上述の区別が示唆するような形で明確に構想しているわけではない」[加藤・浜本 1982: 58]として Douglas [1966] の報告するレレの「呪詛」を事例として挙げている。
- (13) もちろん、この問いを中心的な課題としてべつに論考をたてることも可能であろう。その場合には、ギンズブルグ [1986] が論じたような社会的想像力の可能性を追求することになろう。そうした示唆は一橋大学の岡崎彰教授より与えられた。

参考文献

Adong, J & J. Lakareber

- 2009 *Lwo- English Dictionary*. Kampala: Fountain Publishers.
- Douglas, Mary
- 1966 *Purity and Danger: An Analysis of the Concepts of Pollution and Taboo*. London: Routledge & Kegan Paul.
- Hayley, T. T. S.
- 1940 The Power Concept in Lango Religion. *Uganda Journal* 7 (3): 98-122
- 1947 *The Anatomy of Lango Religion and Groups*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Lienhardt, G.
- 1961 *Divinity and Experience: The Religion of the Dinka*. Oxford: Clarendon Press.
- Mogensen H. O.
- 2002 The Resilience of *Juok* : ConfrontingSuffering in Eastern Uganda. *Africa* 72 : 420-436.
- Oloka-Obbo, Michael
- 2016 Differences of the Methodologies Findings: An Overview. In Shiino, W., Shiraishi, S. & Tom Ondicho (eds.) *Re-Finding African Local Assets and City Environments: Governance, Research and Reflexivity*. Tokyo& Nairobi: Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa, Tokyo University of Foreign Studies & JSPS Nairobi Research Station. pp. 95-99.
- Ocholla-Ayayo, A.B.C.
- 1976 *Traditional Ideology and Ethics among the Southern Luo*. Scandinavian Institute of African Studies. Uppsala.
- Owora, Paul
- 2016 Ugandan Sociologists Met a Japanese Anthropologist: Experience of the Decade. In Shiino, W., Shiraishi, S. & Tom Ondicho (eds.) *Re-Finding African Local Assets and City Environments: Governance, Research and Reflexivity*. Tokyo& Nairobi: Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa, Tokyo University of Foreign Studies & JSPS Nairobi Research Station. pp. 101-103.
- 梅屋 潔
- 2007 「酒に憑かれた男たち—ウガンダ・パドラにおける『問題飲酒』と妖術の民族誌」『人間情報学研究』第12巻：17-40。
- 2008 「ウガンダ・パドラにおける『災因論』—*juogi*, *tipo*, *ayira*, *lam* の観念を中心として」『人間情報学研究』第13巻：131-59。

- 2009 「ウガンダ・パドラにおける『災因論』—現地語 (Dhopadhola) 資料対訳編」『人間情報学研究』第 14 巻：31-42。
- 2010 「酒に憑かれた男たち—ウガンダ・アドラ民族における酒と妖術の民族誌」『人=間の人類学—内的な関心の発展と誤読』中野麻衣子・深田淳太郎編著、15-34、はる書房。
- 2011 「ある遺品整理の顛末—ウガンダ東部トロロ県 A・C・K・オボス=オフンビの場合」『国立歴史民俗博物館研究報告』169 集：209-240。
- 2012 「アフリカのある村における死霊の観念と施術師、そして呪い歌」『地域構想学研究教育報告』第 2 号：70-80。
- 2014a 「ウガンダ東部アドラ民族における *okewo* の儀礼的特権—現地語 (Dhopadhola) 資料対訳編」『人間情報学研究』第 19 巻：9-28。
- 2014b 「ふたりの調査助手との饗宴 (コンヴィヴィアリティ)—ウガンダ・アドラ民族の世界観を探る」『フィールドに入る (FENICS 百万人のフィールドワーカーシリーズ、第 1 巻)』(椎野若菜・白石壮一郎編) 158-181、古今書院。
- 2015 「葬送儀礼についての語り—ウガンダ東部・アドラ民族におけるオケウォの儀礼的特権」『森羅万象のささやき—民俗宗教研究の諸相』(鈴木正宗編) 375-396、風響社。
- 2016a 「ウガンダ東部パドラにおける「災因論」の民族誌—死霊と憑依、毒そして呪詛の観念 (I)」(協力：マイケル・オロカ=オボとポール・オウォラ)『国際文化学研究』第 47 号：25-49。
- 2016b 「「伝統」を逆照射する—ウガンダ東部パドラにおける聖霊派キリスト教会の指導者たち」(協力：ポール・オウォラとマイケル・オロカ=オボ)『近代』第 115 巻：1-43。
- 2017a 「ウガンダ東部パドラにおけるティポ *tipo* の観念」『人間情報学研究』第 22 巻：29-59。
- 2017b 「ウガンダ東部パドラにおける「災因論」の民族誌—死霊と憑依、毒そして呪詛の観念 (II)」(協力：マイケル・オロカ=オボとポール・オウォラ)『国際文化学研究』第 48 号：77-109。
- 2017c 「あるポストコロニアル・エリートの死—ウガンダ東部パドラにおける埋葬儀礼の記録」(協力：ポール・オウォラとマイケル・オロカ=オボ)『近代』第 116 巻：1-74。
- 2017d 「ルスワ *luswa*—ウガンダ東部パドラにおけるインセスト・タブー」(協力：マイケル・オロカ=オボとポール・オウォラ)『国際文化学研究』第 49 号：1-22。
- 2018 『福音を説くウITCH—ウガンダ・パドラにおける災因論の民族誌』風響社。

印刷中 「ウガンダ東部パドラにおけるラム *lam* の観念」『人間情報学研究』第23巻：
頁数調整中。

加藤 泰・浜本 満

1982 「妖術現象理解の新展開についての試論」『東京大学教養学部人文科学科紀要・
文化人類学研究報告』3：55-93。

ギンズブルグ、カルロ

1986 『ベナンダンティ—16-17世紀における悪魔崇拜と農耕儀礼』竹山 博英訳、せり
か書房。

長島 信弘

1995 「オウム事件と現代社会」『へるめす』第56号：50-58。

浜本 満

2014 『信念の呪縛—ケニア海岸地方ドゥルマ社会における妖術の民族誌』九州大学出
版会。

謝辞

本研究の成立に関しては笹川科学研究助成金（研究番号13-054）にとくに感謝する。
主な調査と資料の整理は以下の科研費によっている。科研費18720245、24520912、
23242055、15K03042、16H05664、16K04126。記して感謝する。

（うめや・きよし 社会人類学・アフリカ民族誌）